
すれ違い

朝日蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すれ違い

【Nコード】
N1561A

【作者名】
朝日蓮華

【あらすじ】
ある日偶然街中を歩いていた一人の少女は、好きな少年が親友と仲良く歩いているところを目撃してしまった。ショックを受けた彼女は。。。

ある日偶然彼とばったり出会ってしまった．．．私の片思いの彼と．．．

何となく街へと出かけ、久しぶりに沢山買い物何かしようかなって思つて．．．上機嫌で街の通りを一人歩いてウインドショッピングなんか楽しんでた．．．最近友達と一緒にいるが疲れてきた．．．たまには一人になりたいつてそう思つたから．．．でも．．．やつぱ家でゆつくりしていた方が良かったかもしれぬ．．．。人混みに紛れそれをかき分けて私は前に行く．．．ふとその時あの人の姿を見つけた．．．勇気を出して声でも掛けてみようかと思ひ小走りで近づいていった．．．すると、彼の横に誰かいることに気が付く．．．あれつて．．．もしかして．．．

「．．．嘘．．．」

彼の横で微笑みながら腕を組んでいた女の子．．．それはクラスで噂されていた可愛い女の子．．．いなりみゆ稲荷美優。最近彼とつき合つているんじゃないかって噂されていたつて．．．しかも私の親友だ．．．。しばらく一氣に重なつた二重のシヨックでその場にたたずんで呆然としていた．．．。

「あれ？凜？」

不意に遠くでそう声がして、私はハツと我に返り気づかないふりをして急いできびすを返した。だって話したくもなかったから．．．走っている時、なんだか泣きそうな気がしてそれを抑えるのに必死で走つた．．．絶対に泣かない！あたしの気持ちを美優は知らなかつたんだから仕方ない．．．よく見ればお似合いだし、あの二人．．．明日会つたら笑顔で喜んであげなくちゃ．．．

「ありや？気づかなかつたみたい。」

「え？凜がいたのか？」

一方、私の知らないところで、走り去った私の姿を見て美優は残念そうにそう言つて頬に手を当てた．．．その後ろから、彼かしわぎ柏木海都が慌いとててそう言つと気まずそうに頭をかく．．．彼は私の幼馴染み．．．

「見られたかな？」

「さあ？あの子たまにほへつてしてるからねえ．．．」

「そうなんだよなあ．．．」

翌朝、私は気を引き締めて学校へと向かう．．．昨日のことはシヨックだけど．．．ひと晩寝たら落ち着いてきたし！切り替え早いの
が私の取り柄の一つだもん、きつと二人にあつても笑つて話せる．
．
．
．
きつと。

「おつはよお〜！」

教室に入るなり元気にそう挨拶したのは美優であつた。彼女の笑顔を見て何となくほつとした．．．昨日のこと怪しまれて無くつてよかつたかも．．．。

「おはよ。」

私も何とか笑顔でそう言つと、席へと着いた。よし、普通でいられる．．．なんだか思ったよりシヨックじゃなかつたのかも．．．そう思いつつドアにふと目を向けるとまさに海都が登校してくるところであつた．．．目があつた瞬間、私の心はものすごく混乱した．．．

「おはよ。」

「あ、おはよお〜！」

「お、おはよ．．．」

なんとか声をだしそう言つのが今の私にとって精一杯のことだつた。けど、なんだか私の思考は思いつきり空回りして混乱している．
．
．
お、落ち着かなくちゃ．．．とりあえず二人の事を笑顔で喜んであげなくては．．．そう思つけどなかなか頭が言うことを聞かない．．．なんだかそうしてるところに．．．この二人の前にいるのがとても辛く、耐えられない．．．すぐにでもその場を去つてしま

たかったが金縛りみたいに動かない。

「どうしたの？凜？」

「．．．な、なんでも．．．ちょっと頭痛くつて．．．保健室行つてくるね．．．」

「なんだ？本当に顔色悪いな．．．一人でいけるか？」

「平気！一人で行くから．．．」

なんだかほつといて欲しかった．．．海都の優しさがいつも嬉しいのに今はとても痛かった．．．だってもう、美優のものなんだから。ふらふらした足取りで廊下へと出るとそのまま保健室まで行く。とだれもいなかった．．．よかつたあ．．．。そう思った瞬間自然と涙が頬をつたつて止めどなく流れた．．．それからしばらく、私は思いつきり泣いていた．．．。

「心配なら行けばいいのに？」

教室、美優は心配そうにしている海都に向かってからかうようにそう言つて背を思いつきり叩く．．．

「いつてえ〜．．．お前なあ．．．人ごとだと思つて。」

「思いは伝えろつて言うでしょ？何のためにあたしが貴重な休日につきあつてあげたのやら．．．」

「．．．でもなあ〜．．．あいつ俺のことただの友達としかおもつてねえよ．．．」

「鈍いもんねえ〜．．．二人とも。」

「はあ？」

「さつさといけばあ〜？そんな十年間も片思いしてんだつたら。」

海都は少し戸惑つてから何か袋を手に取り教室を後にした．．．。そんな姿を美優は笑顔で見送る。

「肩が痛い．．．昨日変な寝方したせいかなあ〜．．．」

一通り一人で思いつきり泣いたらなんだかすつきりして、私の思考は全く関係ない方向へと向きつつあった．．．今日の朝ご飯ちやんと食べてくれば良かった．．．とか泣いたらお腹空いたなあ〜．．．とか。私は物心ついたときから人前で泣いたことも、一人でこん

なに泣いたこともなかった．．．久しぶりだなあ．．．泣くなんて。すつきりした気持ちで顔を洗った後保健室を後にし、裏庭へと出る．．．授業なんかもう今はどうでもいいや．．．しばらく座ってほおづえをつきながら何とも無しにぼけ〜っとしていた。

ガララッ

私がこうしているころ、海都は保健室のドアを思いっきり開けていた。

「．．．なんでいないんだ？あいつ．．．」

からになった部屋の中を見て、溜息を一つつくと再び急いで廊下を走っていく．．．やがて、裏庭へと着くと私の姿を見つけたかと近づいてきた。

「おい．．．凜？」

「．．．．．」

私は全く気が付いていなかった．．．何とも無しに蝉の鳴き声を聞きながら木陰でぼけ〜っとしていたのだから．．．それに気が付いたのか、海都はさっきよりも大きな声でしかも耳元で私を呼んだ。

「凜！」

「うわあ！？び、びっくりしたあ．．．お、おお驚かせないですよ！」

耳に手を当てながら、私は本当に驚いたので目を見開いて海都を見てそういう。

「さぼりか？」

「黙れ同類。私のことはほっとしてよ．．．今現実逃避してたんだから。」

くるりと背を向け、私は再び前の体勢に立て直す．．．なんだかいつもの調子に戻ってきてる．．．人間思いつきり泣く事って必要なんだな．．．

「俺はお前を捜してたんだ！何で一つの場所にじっとしてられないんだ？」

「人間だし．．．」

「．．．なるほど。って耳塞くなよ!？」

「美優、心配してるわよ?」

「何であいつのことが?」

「つきあってるんでしょう?だって昨日二人が仲良く腕組んで歩いてるのみたし．．．なんか邪魔しちゃアレだから声は掛けなかったけどね?」

自分で何を言っているのかわからなくなってきた．．．これじゃあなんかひがみっぽくって嫌な感じ．．．でも心なしか顔は笑っているような気がした．．．。

「なんだあれかあ?あれはちょっとな．．．でも、お前の勘違いだそれ。」

「この期に及んでなあゝに隠そうとしてんの?」

「嫌だから違うって!俺は．．．」

何か言いかけてから海都は言葉に詰まる．．．私は不思議そうに首を傾げその続きを待っていた。うゝん．．．ならなんだというのだろうか?昨日何のために．．．

「これ買いに行くのつき合ってもらったんだよ．．．今日お前の誕生日だろ?それで．．．」

私の腕に綺麗にラッピングされた袋が押しつけられた．．．海都は、そっぽを向いていたが僅かに頬が赤くなっているのがわかった．．．なんだかそんな彼を見ると、私まで顔が熱くなってきた．．．えっと．．．勘違い．．．ってああ!そうか!

「あ、ありがとう。日頃お世話を掛けているからそのお詫びってことね?」

「お前俺がお袋に頼まれたと思ってるだろ?」

「え?違うの?」

私はこれはぼけているのではなく、本気でそう思ってたのだ
が．．．なぜ溜息つくのだろう?海都は．．．

「凜．．．お前って前から思ってたんだけど．．．ものすごく鈍い

よな．．．」

「何よ？そんなことないわよ！体育はいつも5よ！」

「運動神経とは別だって．．．もういいや．．．そろそろ戻るぞ？」

海都に促され、私はそのまま廊下へと向かおうとした。その瞬間、耳元で何か彼が言った．．．

「え？」

前に行く海都を見て私はしばし時が止まったように動けず、たたずんで彼を見つめる．．．自分の顔が前よりも赤く熱くなり、心臓がばくばくと早く鳴っていくのがわかった。

「聞こえなかつたか？」

その様子を見て、海都は苦笑し私を振り返るとじっと見つめる。

「しっかりと聞こえたわよ．．．」

「耳いいのな？それで？お前はどうかんだ？」

これを言うには勇気がある．．．私はしっかりと深呼吸して心を落ちつかせると、海都の目を見て一言言った．．．好きだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1561a/>

すれ違い

2010年10月8日16時00分発行